

3名が東京2020オリンピック日本代表に内定！

第105回日本陸上競技選手権大会・10000m ～大会ハイライト～

前回大会となる第105回日本陸上競技選手権大会・10000mは、2021年5月3日、静岡県小笠山総合運動公園エコパスタジアムで、例年実施されている日本グランプリシリーズ静岡大会（静岡国際）終了後に開催。東京オリンピックの日本代表選手選考レースを兼ねて実施された。

ここでは、日本陸連公式サイトに掲載したレースレポートを再編集。自国開催のオリンピック代表の座を狙って熾烈な戦いが繰り広げられた前回大会のレースの様をお届けする。

※出場選手の所属、年齢、自己記録、歴代順位等の情報は、大会実施時点のもの。

文：児玉育美（JAAFメディアチーム）

写真：フォート・キシモト

男子10000m

伊藤、待望の初優勝！東京オリンピック日本代表に内定！

出場者多数のために2組タイムレースで実施された男子10000mは、参加資格記録上位者30名とオープン参加の外国人選手2名で組まれた2組目がメイン。

12名が出場した第1組のあと、20時24分にスタートした。

レースは、日本の実業団に所属し、オープンで参加したロジャースシュモ・ケモイ（愛三工業）とクレオファス・カンディエ（三菱重工）が1000mごとに交互で先頭に立つ形でペースメイクした。最初の1000mを2分44秒、次の2000mも2分44秒（通過タイム5分28秒）とイーブンで入ると、その後は1周66～67秒のペースを刻んでいく。先頭から途切れることなく縦の塊となった集団は、レースが進むにつれて長くなり、徐々に絞られていくことになった。

日本選手では、青木祐人（トヨタ自動車）、鎧坂哲哉（旭化成）、牟田祐樹（日立物流）、市田孝（旭化成）らが順番にトップに立ったが、前年12月に実施された前回日本選手権において、すでに東京オリンピック参加標準記録を突破済みの伊藤達彦（Honda）は、常に日本人の2～4番手に位置してレースを進めていく。また、牟田がいったん大きくリードを奪った4400m過ぎあたりでは、駒澤大学の鈴木芽吹と田澤廉が上位へと浮上。5000mを過ぎたところで市田がトップに立った際、すぐにこれにつき、日本人の先頭集団は6000m付近では市田・鈴木・田澤・伊藤・茂木圭次郎（旭化成）の5選手になった。

さらに動きがあったのは残り8周を迎えたあたり。19歳の鈴木がトップを行く市田をかわして先頭に立つと、すぐこれに反応して20歳の田澤が2番手に。伊藤も市田を抜いて駒大コンビにつき、7000mを通過するときには、優勝争いは3人に絞られる形となった。その後は、鈴木、田澤、伊藤の並びが変わることなく、1周67～68秒前後のペースで、8000mは22分09秒、9000mは24分58秒で通過していく。勝負に直結する動きが出たのは残り2周を切って9200mを過ぎたところだった。そこまで一度も前に出ることのなかった伊藤がペースを切り替え、先頭に立つと、バックストレートで後続との差を広げていく。この周回を62秒で回った伊藤は、ラスト1周は59秒台に引き上げ、27分33秒38で念願の初優勝。条件を満たしたことで、この種目で男子2人目となる東京オリンピック代表に内定した。



2位・3位を占めたのは田澤・鈴木の駒大コンビ。

伊藤がスパートした際に、田澤はその動きに反応して、鈴木をかわし、3位から2位へ浮上。伊藤のキックに追いつくことはできなかったが、この種目で日本人学生歴代2位となる27分39秒21でフィニッシュ。前回のこの大会でマークしていた自己記録27分46秒09を更新した。また、3位となった鈴木も最後まで粘り、同歴代3位となる27分41秒68の好記録で続き、2020年4月10日の日体大記録会でマークしていた28分00秒67の自己記録を大幅に更新する、初の27分台突入を達成した。

女子10000m

廣中、わずか2回目の10000mで女王に！ 2位・安藤と、オリンピック出場権を獲得

女子10000mは、同日に開催されていた静岡国際の競技が終了した約2時間30分後、それまで会場内を吹いていた風がぴたりと収まった19時03分に、決勝がスタートした。

オープン参加の外国人選手1名を含めて20名で行われたレースは、スタートしてすぐに廣中璃梨佳（日本郵政グループ）が先頭に立つと、安藤友香（ワコール）、カマウ・タビタ・ジェリ（三井住友海上、オープン）、岡本春美（ヤマダホールディングス）が縦長の先頭集団を形成、少し離れて鍋島莉奈（当時：日本郵政グループ、現：積水化学）を先頭とする第2グループが形成され、1周ごとにトップグループとの差が開いていく展開となった。

第1グループでトップを牽引した廣中は、最初の1000mを3分06秒で入ると、2000mは6分11秒、3000mは9分16秒、4000mを12分21秒で通過。1200m以降は74秒のラップを刻み、精密機械のような正確なペースで周回を重ねていく。3200mを過ぎたところで岡本が後れ、先頭は3選手に。4000m以降は少しペースが落ちたものの、5000mは15分28秒で通過していった。

13周目のバックストレートで、最後尾を走っていた福土加代子（ワコール）を抜いたあと、安藤が廣中をかわして先頭に立ち、廣中がその後ろにぴたりとつく配置に。5600mあたりでカマウが腹部を押さえながらペースダウンしたことで、その後は、2人のマッチレースとなった。

両者は6000mを18分36秒で通過してからは、1周76～77秒から78秒へと次第にペースを落としつつレースを進めていく。7000mを過ぎたあたりから安藤に並びかけるようなアクションをみせていた廣中が、残り3周となった8800mを通過したところでスパート。この周回以降を73秒、73秒、70秒で回って安藤を突き放し、日本歴代7位となる31分11秒75で先着。10000mのトラックレース経験わずか2本目にして、日本選手権での初優勝を果たすとともに、東京オリンピック参加標準記録31分25秒00も突破したことで選考条件を満たし、この種目の東京オリンピック日本代表選手に内定した。



終盤で突き放された安藤も最後までよく粘り、前回大会でマークした自己記録（31分37秒71）を大きく更新する31分18秒18（2位）でフィニッシュ。同じく参加標準記録を突破して、廣中に続く「3枠目」の座を手に入れた。

3位に食い込んだのは、2021年シーズンに入って好調な推移を見せていた大学生の小林成美（名城大）。32分12秒31（4位）でフィニッシュした岡本、32分16秒07（5位）で続いた筒井咲帆ら、ヤマダホールディングス勢に先着して、32分08秒45の自己新記録をマーク。日本選手権の表彰台に上がった。

